

期末評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 次年度への方策等
<p>【第1学年】</p> <p>○ほぼ全児童はひらがなや数字を正しく書く力を身に付け、ノートなどに素早く書くことができるようになった。</p> <p>○数に対する理解を確実に、繰り上がりのたし算や繰り下がりの引き算も8割の児童が習得している。</p> <p>○タブレット端末の基本操作はほぼ全員ができ、写真を撮って作品を作り、意見を入れたり、物語を作ったりして、オクリンクを使って交流できた。</p> <p>▽国語の読解などの問題で、どのように取り組むかが分からない児童が見られた。ただ、その場合母国語が違う児童が多く、日本語学習も取り入れながら読み取り方のコツを学習している。</p> <p>▽授業中に発表できる児童は少しずつ増えてきているが、自信がない児童も多く、合っている確信がもてないと発表に踏み切れないでいる。</p> <p>【第2学年】</p> <p>○グループでの話し合いや発表などの場をできるだけ設定し、慣れてできるようになった。</p> <p>○漢字、かたかななどの文字はある程度正確に素早く書けるようになってきた。</p> <p>○絵日記など定期的を書く場を設定し、簡単な構成である程度長い文章を書くことができるようになった。</p> <p>○たし算、ひき算、かけ算の計算が正確に素早く答えを出すことができるようになった。</p> <p>▽話を集中して聞き、理解し、行動に移すことが苦手な場面が見られる。</p> <p>▽物語や説明文など長い文章の読み取りが苦手な場面が見られる。</p>	<p>●年度末までに漢字80文字を確実に身に付けて、日々の生活の中でも使いこなせるようにする。</p> <p>●繰り上がり、繰り下がりの計算は、時間がたつと手順を忘れがちになるので、単元の時だけでなく家庭学習などでも取り入れるようにする。</p> <p>●漢字や計算ではデジタルドリルを活用しているが、児童が自分に必要な学習に取り組めるようにする。</p> <p>●タブレット端末の基本的な操作方法や管理方法の習得の場面を設定する。</p> <p>▼児童にとっては難しいと思われる読解問題をどのように読み解くかを、具体的な問題で示していく。</p> <p>▼発表した際に、内容的に価値付するとともに、発表意欲に称賛する。褒められれば意見を言う気持ちになるが、否定されれば発表する気持ちにならないのは、大人も児童も同じである。</p> <p>●グループでの発表は心強く楽しく発表している姿が多く見られたので、この経験を生かして一人でも堂々と発表できるようにする。</p> <p>●年度末までに漢字160字、カタカナを完全に習得し、日常で使うことができるようにする。</p> <p>●文章を書く機会をできるだけ作り、書くことに慣れるようにする。苦手な子は少しでも良いことにして、苦痛にならないよう配慮する。</p> <p>●筆算や九九など忘れないように、繰り返しやることで定着させる。</p> <p>▼話を聞くときの姿勢や視線を確認するなど、集中して聞くことができるよう様々な工夫をする。</p> <p>▼読み取りは、線を引かせるなど叙述をもとに考えることができるよう工夫していく。読書の機会も多く設定する。</p>

【第3学年】

- 「ひがと学びスタンダード」を活用して、基本的な話の聞き方を繰り返し指導した結果、少しずつ話の聞き方が上手になってきた。
- 漢字学習では、デジタルドリルと紙ドリルを併用した結果、学びの機会を増やすことができた。
- 算数では、児童同士が考えを交流する時間の設定や解決の見通しをもたせるための視覚的支援を行った結果、すすんで課題解決に取り組む児童が増えた。
- ▽基本的な知識・技能の定着が十分ではない児童、文章題の苦手と思う児童も多いため、継続した支援が必要である。

【第4学年】

- タブレット端末を活用した自己表現の積み重ねから、自分の思いや考えを、順序立てて分かりやすく伝える力が育ってきた。
- 1日1問計算やデジタルドリルの活用から、基本的な計算力が身に付いてきている。
- 学校図書館を活用した調べ学習や授業中の辞書引きの積み重ねから、主体的に学び、自分なりの考えをもって問題解決に取り組む姿が見られるようになった。
- ▽集中して話を聞く力が弱く、「最後まで」「話の内容を落とさずに」聞くことに課題がある。
- ▽説明文の読解や要約に苦手意識のある児童が多い。
- ▽概数の表し方や使い方、小数のかけ算やわり算の単元に苦手意識をもつ児童が多い。

【第5学年】

- 読書や音読の時間を増やしたことで、文章の構成を考えたり、語彙が増えたりする児童が増えた。
- 毎日、計算技能を身に付けるための計算スキルやデジタルドリルの課題を出したことによって、7割の児童が小数のわり算やかけ算の技能が身に付いてきた。

●次年度も「ひがと学びスタンダード」を活用して話の聞き方や話しの仕方を繰り返し指導し、学び方の基本ができるようにする。

▼漢字をいろいろな方法で学んでいる一方で、きちんと定着している児童が少ないため、デジタルドリルの進捗具合を確認して課題を設定したり、配信したりして定着を図る。

▼デジタルドリルを活用し、基礎的な知識・技能の定着を図る。また、文章題からの立式や計算方法を友達との交流の時間に教え合う活動を通して、改善を図る。

●日直の1分間スピーチの時間を確保し、相手意識をもった分かりやすい説明を意識付ける。上手な説明にはよさを価値付け、友達のよさを自分の発表に生かせるようにする。

●1日1問の着実な積み重ねやデジタルドリルの活用を引き続き行っていく。

●すぐにタブレットで検索し調べるのではなく、既習の知識・技能を応用して考える習慣を付けさせる。

▼日頃より学びスタンダードを確認して意識付けし、根気強く指導を続ける。

▼接続詞に注目させ、前後の文の関係や筆者が強調したいことをおさえて読めるようにする。何度も出てくるキーワードに印をつけ、意識して読む習慣を付ける。

▼デジタルドリルを活用し、自分に合った課題に取り組める時間を確保する。

●文字を読む習慣を身に付けられるように、家庭学習や授業で取り組めるようにする。

●計算技能は継続して行い、児童自身がどのような課題が苦手なのかを把握し、自分で学習を選べるようにする。

○PowerPoint の作成や Word の使い方の指導を継続して行った。その結果、プレゼンするときに説得力のあるデータや内容を考えることができた。

▽国語や外国語の学習で辞書や英和辞典を使用した。しかし辞書の使い方が身に付いていない児童がいたり、インターネット上にある正しいのか分からない情報を活用していたりすることがある。

【第6学年】

○漢字を正しく書いたり、既習の漢字を適切に使って文章を書いたりする機会を増やし、漢字テストでは約7割の児童が定着度8割を達成することができた。

○文学的な文章を読み取り、学級全体で登場人物の心情を想像したり、情景描写などの優れた表現を見付けたりすることができた。

○算数は、四則演算や基礎・基本技能を中心にデジタルドリルを活用し、6年間の内容の復習に取り組んだ。

▽姿勢を整え、話を聞く準備をする段階から、周囲に気を取られる児童が多く、話の内容を理解し、最後まで聞くことに課題がある。

▽小数の四則演算、単位量あたりの大きさ、割合の単元に苦手意識をもつ児童が多く見られ、問題場面の理解が難しいと正解にたどり着かないことが多い。

【若草学級】

○学習したことを日常生活に活用できるように、授業の中で意図的に生活場面を想定した問題を取り入れることで、生活の中で自然に使える児童が増えてきた。

○全体指導や個別指導など、児童の実態に応じて様々な授業形態で学習を進め、それぞれの児童の課題である学習に定着が見られる単元もあった。

○授業の始まりや終わりなど、学習した簡単な手話を取り入れる児童が増えてきた。また、手話を使ってコミュニケーションをとろうとする児童の姿も見られた。

▼データを基に考えることができたが、読み取りが不十分のときや、事実と感想が混ざってしまうときがある。より説得力のあるプレゼンをするためにデータの読み取りに注力する。

▼既習内容が定着している児童と定着していない児童の差が目立つ。デジタルドリルや自主学習などで、個々にあった学習が選択できるようにする。

▼話の聞き方は「ひがと学びスタンダード」を活用し、日常的に指導を続ける。

▼小数は、足し算・引き算と、かけ算・わり算で異なる計算方法を混同している児童が多いため、毎日の「1日1問プリント」や、授業初めの帯活動などで、多くの問題に取り組める機会を作る。

▼デジタルドリルを引き続き活用し、自己の課題に合った問題を選択して学習できるよう、自由進度学習の指導にあたる。

●引き続き、児童の実態に合わせて生活場面に関わる学習内容や、校外学習や移動教室などの行事を活用して授業を構成する。

●日常的に身近な会話を手話で表現する学習を進めていき、児童にとっても様々なコミュニケーションツールを増やす。

▽学習した内容でも、時間が空くと忘れてしまい、生活に活かさないことがある。

▽相手の意見を受け入れた会話や意見を交換することに課題がある。

▼繰り返し学習を行い、時間が空いても学習内容を振り返り、思い出していけるような授業の年間計画を作る。

▼学級会などで話し合い方や、話の聞き方など教員を通して実践したり、指導したりする。